

# 用語解説

## 用語解説

を斜めに削った施文具で、土器面を引いたり押し引きしてできた文様を

諸磯式土器	第二章	丸山II遺跡	一〇五頁
十三菩提式土器	〃	〃	〃
撚糸文土器	第二章	富沢内野山I遺跡	一二七頁
野島式土器	第二章	細野沢遺跡	二一二頁
打越式土器	第二章	上川遺跡	二六六頁
神之木台式土器	〃	〃	〃
押型文土器	第二章	峰下遺跡	三二三頁
胎土	第二章	御宿新田遺跡	三二四頁
勝坂式土器	第二章	尾畑遺跡	三四八頁
五領ヶ台式土器	〃	〃	〃
縄文	第二章	柳島遺跡	三九八頁
隆起線文	〃	〃	〃
絡糸体圧痕文	〃	〃	〃
貝殻条痕文	〃	〃	〃
下吉井式土器	第二章	須山大坂遺跡	四〇七頁
木島式土器	〃	〃	〃
関山式土器	〃	〃	〃
半截竹管文	〃	〃	〃

篋、細竹のような管状のものを半分に分けたり、先端

いう。外側の丸い凸面を使えば、大小の沈線文ができる。外側の先で

押し引けば、大小の連続した爪形文ができる。隆起線、隆起帯にも好

んで施される。文様区画の充填文にも使われる。爪形文が特に施され

ている土器を爪形文土器ともいう。内側の凹面を使うと、丸くなった

凸線文と、その両側に沈線ができる。これを連続して施したものを集

合沈線文という人もある。縄文時代早期後半から施文され、中期の土

器に多く施文される。

**角押し引文** 半截竹管または先端が角、三角をした施文具で、土器面

を押し引きしてできた文様をいう。文様区画内の充填文によくみられ

る。

そのほか細く尖った先で描いた細線文、櫛歯状の施文具で描いた平

行・波状文、ヘラを使った彫刻的な刻文や刻み目文などがある。単独

で施文されたものはほとんどなく、各種の施文具を使って、多様な文

様を構成しているのが一般的である。縄文時代後期になると、縄文の

一部を磨り消す磨消縄文という手法があるが、裾野市内では資料が極

めて少ない。

**磨製石斧** 長さ一五cm前後の棒状の河原石を研磨して、その一端に

両刃の刃をつけたもので重量がある。刃部が太く頭が細い。柄を付け、

伐採、割截に使ったとする。縄文時代前期から出土量が多くなる。石

材に硬質砂岩、硬質頁岩、礫岩、変成岩、安山岩を使っている。

**打製石斧** 長さ一〇〜一五cmの扁平な河原石を打ち欠いて、短冊形、

撥形、分銅形に整形し、一端を刃部にしたもので、分厚いものから薄

いものまである。縦に柄を付け、土掘り具に使ったものともいわれて

いる。石材は安山岩、玄武岩、硬質砂岩、硬質頁岩などを使い、縄文時代中期に圧倒的に多い。

**石鏃** 長さ二 cm 前後のものが多く、鏃に使ったもので、形は三角形を基本とし、抉りのあるもの、抉りの深いもの、茎のあるものなどがある。石材は黒曜石が最も多く、そのほか石英、チャート、水晶などを使っている。金沢上川遺跡では、破片まで含めると一〇〇〇点近く出土している。

**磨石** 五〜一五 cm 前後の河原石を、そのまま使っている例が多い。前後にたたき痕、面に磨痕がある。石皿のあて石で、穀のある木の実をつぶすのに使ったものとされている。石材は安山岩が多い。各遺跡から比較的多く出土する。

**石皿** 長径二〇〜五〇 cm 前後の偏平な河原石の、中央が丸くくぼんだものである。縄文時代早期・前期と思われるものは、くぼみが浅く、中期のものは深く、なかには底が抜けて穴のあいたものがある。使用の度合を示している。また両面のくぼんだものもある。石材は安山岩が多い。

**石匙** 長さ三〜五 cm 前後のつまみのついた刃物。サジの形から石さじともいうが、底辺に刃があって刃物であるとする。石材には硬質頁岩、硬質砂岩、黒曜石、チャートなどを用いている。

**石錘** 五〜六 cm 前後の楕円の偏平な河原石の、長軸の両端の中央をひと欠きして抉りを入れたもので、錘り石に使ったものとされている。石材は硬質砂岩、頁岩、安山岩などを用いている。

**石錐** 二〜三 cm 前後の不整形な石器で、一端に軸があり、先端は尖

っている。Y 字形、T 字形をしたものもある。細工用の工具であるとされている。石材は黒曜石が多い。これと似たものに不定形な刃のついたものがあって、多目的な工具、利器に使ったと思われるものもある。

**石棒** 長さ二〇〜五〇 cm、径五〜一五 cm の棒状の石器で、一方の先端に抉り部と頭部のついたものもある。石材は安山岩である。信仰上のもので、立てられていたとする。御宿新田遺跡から出土している。

**玦状石器・大珠** 玦というのは、中国で環の形をして中央の下端が切れている玉器をいうが、この形に似ているので玦状石器という。長さ二〜五 cm 前後で、石材はヒスイ、滑石、蛇紋岩などを使っている。金沢上川遺跡から一六個も出土し注目されている。珠とは、中国で水中から産する玉のように丸い美しい石をいうが、これに似て、中央に孔をあげ紐を通すようになっていて、石材はヒスイである。桃園尾畑遺跡出土のものは、大形で出土例が少なく貴重品である。玦状石器は縄文時代前期遺跡に多く出土し、大珠は中期・後期の遺跡からまれに出土する。玦状石器は身につけて護符や飾りに、大珠は呪術に使われたともいう。

**土坑** 縄文時代を始めとして、弥生時代、古墳時代、歴史時代の遺跡を発掘調査をすると、当時の遺構面（生活した地面）から、円形、楕円形、方形等の大小の穴が検出される。穴の断面は、浅皿形、深皿形、鉢形、深鉢形、半円形などさまざまである。こうした遺構を一般に土坑と呼んでいる。土坑の中に礫がつまっていれば、集石土坑ともいう。大畑遺跡中屋敷地区の土坑のように、中に時代小柄のようなも

のや、かわらけ、六文銭、人骨片などの遺物が出土して明らかに墓と判ったときは、土塚という用語を使う場合もある。このほか土坑は、むし焼き調理の穴、落し穴などとして使ったと判断された例もあるが、大半は遺物もなく、掘った理由や性格は不明な点が多い。

条痕文系土器 第三章 丸山I遺跡 四一四頁

櫛目文の土器 二単位以上の櫛歯状の施文具で、壺や甕、深鉢形の土器面に、平行沈線文、波状沈線文、流水文などを描いた弥生時代の土器をいう。同じ櫛歯状施文具で押し引きした簾状文、連続して押し施文した矢羽根のような羽状文、細縄文に似た擬縄文などがある。弥生土器の典型的な文様で、畿内から全国的に広まっていくが、裾野市御宿宮原で出土した櫛描波状文の土器は、長野県や山梨県地方から出土した弥生時代後期のものとよく似ている。

須恵器 第四章 水窪高田遺跡 四四〇頁

土師器 第四章 下条遺跡 四六九頁

刷毛目 第四章 一色原遺跡 四七四頁

古墳 三世紀末から八世紀の初め頃までの間に造営されたもので、土を盛り上げ、内部に埋葬施設をもった墓をいう。三世紀末から六世紀代の、長径が四〇～五〇m以上の大規模な大型古墳と、六世紀代後半から八世紀代の群をなして造営された、径一〇～一五m前後の小型の後期群集墳とに分けられる。大型古墳は、一つの地域を支配した首長の墓（首長墓・王墓）であり、小型の群集墳は、六世紀代から生産力を高めてきた大家族の家族墓で、数世代が葬られている。裾野市茶畑の中丸古墳は、この付近に十数基あったと思われる七世紀代の群集

墳の一つである。

蕨手刀 柄頭が「わらび」の芽のように渦巻き状になっているので、蕨手刀といわれている。柄はそのままか、葛・藤を巻きつけて用いた。

刀身は短かく身幅が広いのが特徴となっている。七世紀代から九世紀にかけて、中部地方から北海道にかけて分布し、小規模な円墳や当時の住居址から出土する。裾野市内から二本発見されていることは、この時代に東日本の影響が何かの形であったことを示す重要な遺物である。

常滑古窯産の焼物類 常滑焼といえば、すぐに梨肌をした光沢のある赤黒褐色の甕や壺、土管、あるいは朱泥の急須などを思い浮べる特色のある焼物で、愛知県知多半島の伊勢湾に面した常滑市が生産地である。しかしここでいう常滑古窯産の焼物というのは、一二世紀から

一六世紀にかけて営まれた、知多半島の全域に分布する古窯址群で生産されたものをいう。知多半島北部に分布する古窯址では、六〇%以上が山茶碗、小皿を生産している。山茶碗というのは多量に生産され、古窯址のある山に不良品が捨てられて、ゴロゴロと転がっているとこからつけられたもので、小皿、小鉢、碗などを指しているとする。

半島中部に分布する古窯址では、大形の壺・甕が生産されている。これは粘土が大形の器形を作るのに適し、また比較的低い温度でよく焼き締まるからだとされている。半島南部に分布する古窯址では、中部の窯業が南へ下っていったもので、山茶碗のような小物が多く生産されたとする。常滑古窯産の製品には、碗・小皿・小鉢・片口鉢・土鍋・羽釜などの食器類と、壺・甕などの貯蔵用に使われたものに大別

されるが、そのほかに灰釉かいゆうの掛けられた瓶類・長頸壺・水注・経文を収納して埋納する経筒容器のような特殊なものや、蔵骨器に使われた三筋壺などがある。小物類の形態変化はあまりないが、壺や甕は時代によって形の移り変わりがあり、時期区分の目安がたてられている。一三世紀前半までの口縁部は小さく外反して、その外縁端は尖っているが、後半になると壺・甕の肩部が角をもって張り出し、また口縁部が折り返されて縁帯をもつようになる。一四世紀以後は、口縁帯が分厚く貼り付いたようになり、肩の角張りもなくなって丸みを帯びてくる。大形の甕の製作は粘土紐を巻き上げてつくり、整形の叩き目がある。これも時期判断の目安ともなる。大畑遺跡や大畑経塚出土の大甕破片は、これらの特色から一二世紀後半の常滑古窯産のものと同判断された。しかし、その他の遺跡から出土したものは、小破片で年代的半断はつけにくいというのが実状である。

**渥美古窯産の焼物類** なじみの薄い焼物である。これは愛知県の渥美半島全域に分布する古窯址群で、一二世紀前半から一四世紀前半までの、比較的短かい期間に生産されたものをいう。主な製品は壺・甕・鉢・山茶碗・皿などのほか、仏具祭祀用の香炉、長頸壺や埋葬用の蔵骨器（壺）、経塚用の経筒外容器などがあって、器種は多様である。常滑古窯産のものは、胎土が厚手で白色石粒を含み、色調は赤褐色のものが多く、渥美古窯産のものは、胎土に砂目が入り、色調は淡褐色から青灰色、暗青灰色をしたものが多く、薄手作りである。壺・甕の口縁はラッパ状に開き、口縁端が玉縁状たまがちに丸く張り出す。壺の肩部に独特の袈裟禪文けさぜんもん、蓮弁文がある。大畑経塚出土の経筒外容器

は、渥美古窯産のものである。

### 美濃古窯産の陶器類

美濃の焼物といえば、織部とか志野が有名である。美濃焼の歴史は、古く七世紀の須恵器の生産から始まるという。一〇世紀には灰を釉薬にした白瓷びやくしや緑釉の青瓷などが作られ、やがて一二世紀に山茶碗、一三世紀には古瀬戸系の施釉陶器が生産され、一五世紀には、この最盛期をむかえるようになったとする。一般にはこの一五世紀から一六世紀代に、岐阜県の東濃地方で生産された施釉陶器類を、美濃古窯産のものというが、一六世紀の初め、丘陵や台地の谷頭の急斜面直上に吹き上ってくる風を利用して築かれた古窯址で生産された陶器を、別に美濃大窯産のものという。古瀬戸系の施釉陶器というのは、隣接する愛知県瀬戸古窯の製陶技法が伝えられたもので、古瀬戸と区別されている。製品には、天目茶碗・平茶碗・緑釉皿・おろし皿・挿鉢・大平鉢・壺・瓶子・花瓶・香炉など器種は多様である。美濃大窯産の製品も同じ器種のもので生産されるが、一六世紀後半になると、瀬戸黒茶碗・折縁皿・燈明皿・向付鉢や志野茶碗・絵皿など文様の入った特色ある焼物が作られ、器種も一層多様化する。裾野市内の中世の遺跡から発見される遺物のなかで、最も多いのが美濃古窯、美濃大窯産の陶器類で、なかでも挿鉢と天目茶碗がよく目につく。挿鉢はねずみ色に発色した釉薬がかかり、胎土は明黄褐色をしている。内面底部から上に向かって放射状に八〜一六単位の櫛目（挿り目）が入っているのが特色である。一五世紀後半から一六世紀初めまでのものは、口縁が平縁で、以後のものは口縁が立ち上り縁帯をもつようになる。千福馬場添遺跡からは、このほかに縁釉皿、おろし皿、鉄釉小皿

などが出土している。

**土塁** 等五章 深良上丹屋敷 五一〇頁  
 郭 等五章 千福城跡 五七一頁

**曲輪** //

**空堀** くだん水を湛えていない防御のための堀をいう。水を湛えて

いれば濠という用語を使う。断面の両壁が直かまたは逆台形で、底の平らな堀を箱堀、逆三角形のものを薬研堀などという。

**豎堀** たてぼり 山城跡で、城郭を構成する山の斜面に、上から下へ直線状に掘られた空堀をいう。

**堀切** 山城跡で、城郭を構成する山稜の一部または鞍部を、直角に掘り切った空堀をいい、空堀切ともいう。

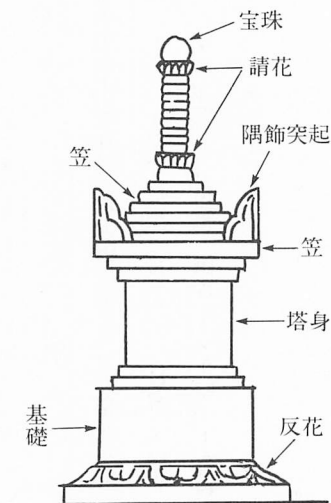
**平場** ひらば 山城跡で、城郭を構成する山稜、斜面の一部を防御のため削平して、平坦部分にしたところをいう。郭ともいう。

**虎口** こぐち 城の出入口をいう。この虎口に方形の防御施設を設けて、対となるところに二カ所出入口のあるものを、枡形囀という。

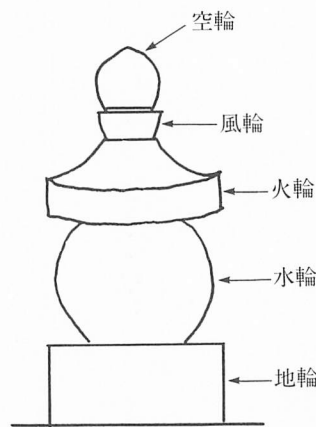
**五輪塔** ごりんとう 石造の卒塔婆の一種で、供養塔、墓塔、舍利塔として建てられた。五輪塔の起りは仏教の密教の教えのなかに、あらゆる事物が土・水・火・風・空の五大を元素として構成され、円輪をなすことに模してつくられたものであるという。塔形は下部から基礎の地輪、塔身の水輪、笠形の火輪、請花の風輪、頂部宝珠の空輪と組立てられている。正面から見た形状は、四角、円形、三角形（頂部の狭い台形）、半円形、宝珠形となっている。また礎石に基壇、反花座を設ける塔もある。石塔は空・風輪を一石で刻み、火・水・地輪の四石で建ててあ

るものが多い。五輪塔は一世紀頃から建てられ始めて、一三世紀には形態が整い、巨大な五輪塔もつくられる。ついで一四世紀の南北朝時代頃になると数多く建てられるようになり、形は中型のものとなっていくが、一五世紀には小型化して、高さも平均化する。

**宝篋印塔** ほうきやくいんとう 石塔の卒塔婆の一種で、宝篋印陀羅尼を納める塔が後



宝篋印塔



五輪塔

に供養塔、墓碑塔として建てられるようになったという。五輪塔と共に石塔数の多いものとする。古代末から中世にかけて栄えた地域に多く建てられ、地方的な様式変化がみられるという。形態は下部から反花座・塔身・笠・相輪の部分からなり、基礎と塔身に方形の枠が刻まれ、笠は方形状となり、その四隅に隅飾突起がつけられる。相輪には<sup>うけばな</sup>請花と頂部に宝珠がつく。一三世紀から一四世紀には大型のものが多いが、一五世紀代に入ると小型化し、部分的に簡略化される傾向がみられるという。

引用・参考文献(順不同)

- 小林達雄「縄文土器Ⅰ」日本の原始美術1 講談社 昭和五四年
- 佐原 眞「縄文土器Ⅱ」日本の原始美術2 講談社 昭和五四年
- 工楽善通「弥生土器」日本の原始美術3 講談社 昭和五四年
- 原口正三「須恵器」日本の原始美術4 講談社 昭和五四年
- 江坂輝彌・芹沢長介・坂詰秀一編「日本考古学小辞典」ニューサイエンス社 昭和六〇年
- 江坂輝彌・芹沢長介監修「考古学ハンドブック」考古学ライブラリー39 ニューサイエンス社 昭和六〇年
- 増島 淳「県東部地区の縄文土器作製地について」沼津市博物館紀要14 沼津市歴史民俗資料館・明治史料館 平成二年
- 高木照正「石器・石材の研究(1)―沼津市及び周辺出土石器―」沼津市博物館紀要15 沼津市歴史民俗資料館・明治史料館 平成三年
- 山本恵一「静岡県東部の古墳時代後期の土師器について」沼津市立

博物館紀要13 沼津市歴史民俗資料館・明治史料館 平成元年

- 紅村 弘「西日本・中部日本に於ける弥生時代成立論」紅村 弘 一九八七

○「日本城郭大系別巻Ⅱ」新人物往来社 昭和五六年

○赤羽一郎「常滑―陶芸の歴史と技法―」技報堂出版 一九八三

○「考古資料編・館藏品資料集・国指定文化財考古資料集」展示品図録第2集 常滑市民俗資料館

○出川直樹監修「やきもの鑑定入門」芸術新潮編集部編 新潮社 一九八三

○野村泰三「陶磁用語辞典」カラーブックス432 保育社 昭和五六年

○田口昭二「美濃焼」考古学ライブラリー17 ニューサイエンス社 昭和五八年

○埴原和郎編「縄文人の知恵」小学館創造選書 小学館 一九八五



## 裾野市関係考古文献

第一章から第四章まで

○「駿河記」 麦塚・茶畑村 「座頭塚」「十三塚」

○芝田清吾「駿東郡の遺跡」 人類学雑誌 日本人類学会 大正四年

○足立敏太郎「最近調査したる駿東富士の古墳につきて」 静岡県史

蹟名勝天然記念物調査報告 静岡県 昭和二年

○柴田常恵「富士の遺跡」 泉村茶畑遺跡・深良村深良遺跡 官幣大

社浅間神社社務所 古今書院 昭和四年

○「静岡県史第一巻」 静岡県庁 昭和五年

○静岡県立沼津中学校歴史科「沼津市駿東郡石器時代及金石併用時代

遺跡遺物一覽表」 静岡県郷土研究第一輯 静岡県郷土研究会 昭和

八年

○江藤千萬樹「沼津駿東郡地方に於ける弥生式文化様相」 静岡県郷

土研究第九輯 静岡県郷土研究協会 昭和一二年

○小野真一「駿豆地方の土偶と顔面把手」 上代文化二九 上代文化

研究会 昭和三四年

○小野真一「組合式箱形石棺の考擦―駿河湾地方を中心として―」

考古学雑誌四六 昭和三五年

○小野真一「裾野町寺山遺跡出土土器の一考察」 駿豆考古第5号

駿豆考古学会 昭和三六年

○笹津備洋「静岡県東部における縄文晩期と弥生初頭の遺跡」 駿豆考古学会研究発表要旨 駿豆考古学会 昭和三七年

○静岡県立沼津商業高等学校郷土研究部「沼津市を中心とする旧石器文化の遺物の考査」 昭和三八年

○小野真一「静岡県駿東郡寺山遺跡」 日本考古学年報12 日本考古学協会 昭和三九年

○静岡県立裾野高等学校郷土研究部「裾野市富沢字内野山遺跡につ

て」 郷土研究17号

○郷土誌「裾野」 郷土誌「裾野」編集委員会 昭和四〇年

○芹沢充寛「御宿新田遺跡」 裾野郷土研究創刊号 裾野郷土研究会

昭和四一年

○笹津海洋(備洋)・小野真一・佐藤民雄「駿東郡裾野町上川遺跡発掘

調査概報」 日本道路公団・静岡県教育委員会 昭和四三年

○芹沢充寛「深良新田中之島遺跡」 裾野郷土研究第3号 裾野郷土

研究会 昭和四三年

○笹津海洋「静岡県裾野町屯屋敷遺跡」 日本考古学年報 日本考古

学協会 昭和四五年

○佐藤 隆・芹沢充寛「駿東郡裾野町桃園尾畑遺跡発掘調査報告書」

裾野郷土研究第4号 裾野郷土研究会 昭和四五年

○芹沢充寛「今里出土の古銭」 裾野郷土研究第4号 裾野郷土研究

会 昭和四五年

○笹津海洋・芹沢充寛「裾野市屯屋敷遺跡発掘調査報告書」 裾野市

教育委員会 昭和四八年

○笹津海祥・芹沢充寛「裾野市公文名日向・丸山Ⅰ・丸山Ⅱ遺跡発掘調査報告書」裾野市教育委員会 昭和五〇年

○小野真一「ゆづり葉」加藤学園考古学研究所 昭和五〇年

○芹沢充寛・井上輝夫「裾野市千福市場平遺跡予備調査報告」裾野市教育委員会 昭和五〇年

○小野真一「裾野市上川出土縄文前期の土器」駿豆考古第18号 駿豆考古学会 昭和五一年

○笹津海祥・芹沢充寛「裾野市茶畑道場山遺跡発掘調査概報」裾野市教育委員会 昭和五一年

○渡辺徳逸「滝沢古墳」須山地方の古代 昭和五一年

○芹沢充寛「裾野市富沢内野山遺跡緊急発掘調査について」駿豆考古第19号 駿豆考古学会 昭和五二年

○渡辺徳逸「蕨手刀の出土状況」裾野郷土研究第8号 裾野郷土研究会 昭和五二年

○笹津海祥ほか「裾野市深良城ヶ尾遺跡発掘調査報告書」裾野市教育委員会 昭和五二年

○芹沢充寛「御宿新田遺跡」裾野郷土研究9号 裾野郷土研究会 昭和五三年

○芹沢充寛「裾野地方の古代遺跡と古代文化」裾野市「郷土史研究教室」資料 昭和五三年

○芹沢充寛「裾野地方の弥生時代」裾野市「郷土史研究教室」資料 昭和五三年

○「裾野の文化財」裾野市教育委員会 昭和五四・六一年

○井上輝夫・宮井英一ほか「裾野市千福市場平第一・第二・小杉平第一・第二・細野沢遺跡発掘調査報告書」裾野市教育委員会 昭和五七年

○小野真一編「駿河・伊豆地方の考古資料（特別展図録）」加藤学園考古学研究所 昭和五七年

○小野真一編「駿豆地方の縄文土器集成（実測図）」加藤学園考古学研究所 昭和五八年

○芹沢充寛・井上輝夫「裾野市大畑中畑・裾野市富沢内野山遺跡発掘調査報告書」裾野市教育委員会 昭和六一年

○中野国雄・袴田 稔「上川遺跡」日本道路公団・静岡県教育委員会・裾野市教育委員会 昭和六二年

○渡瀬 治・中野国雄「桃園入ノ洞遺跡」建設省中部建設局・静岡県教育委員会・裾野市教育委員会 平成元年（合本）

○袴田 稔・渡瀬 治・中野国雄「大畑遺跡」建設省中部建設局・静岡県教育委員会・裾野市教育委員会 平成元年（合本）

○井上輝夫・袴田 稔・中野国雄「富沢原遺跡」建設省中部建設局・静岡県教育委員会・裾野市教育委員会 平成元年（合本）

○渡瀬 治「裾野市内の遺跡概要」裾野市史研究第二号 裾野市史編さん委員会 平成二年

○「静岡県史資料編1・2」考古一・二 静岡県 平成二年

第五章から第六章まで

○駿国雑誌 ○駿河志料 ○駿河記 ○新修駿河国新風土記



- 「静岡県駿東郡誌」 静岡県駿東郡役所 大正五年
- 沼館愛三「駿東地方に於ける城郭の研究」 静岡県郷土研究第九輯 静岡県郷土研究会 昭和一二年
- 市川隆雄・佐藤 隆「研究 大畑城址と大畑部落」 裾野郷土研究 創刊号 昭和四一年
- 静岡県立沼津東高等学校郷土研究部「沼津周辺の城砦の研究」 東 静岡郷土研究連盟編 昭和四二年
- 伊禮正雄「御殿場地方の中世城址」 御殿場市史研究1 御殿場市 史編纂委員会 昭和五〇年
- 「日本城郭大系9 静岡県・愛知県」 新人物往来社 昭和五四年
- 中野国雄「駿東地方の城館跡について」 駿豆考古第23号 駿豆考古学会 昭和五五年
- 「静岡県の中世城館跡」 静岡県教育委員会 昭和五六年
- 関口宏行「葛山氏を語る」 葛山城址保存会 昭和五七年
- 中野国雄「裾野市内に於ける中世城館跡について」 裾野市史研究 第一号 裾野市史編さん委員会 平成元年

(植松章八・瀬川裕市郎)

裾野市史編さん関係者

市史編さん委員会

委員長 高村 公 助役

副委員長 勝又 壽 学識経験者

委員 伊藤政秋 同

同 鈴木 強 同

同 芹沢充寛 同

同 羽田 勲 同

同 渡辺藤男 教育委員長

同 有光友學 専門委員代表

同 芹澤 仁 教育長

同 渡辺 恵 企画調整部長

同 西川久雄 総務部長

同 渡辺武彦 財政課長

同 真田利彦 企画調整課長

同 羽田 久 学校教育課長

旧委員長 (故) 久保文和 (平成三年一月逝去)

市史編さん専門委員

代表 有光友學 横浜国立大学教育学部教授

高橋 敏 国立歴史民俗博物館教授

中野國雄 日本考古学協会会員

福田アジオ 国立歴史民俗博物館教授

安田常難 電気通信大学教授

四方一彌 国土館大学教授

市史編さん調査委員

井口俊靖 加藤学園暁秀中学校教諭

石田義明 静岡県立葦山高等学校教諭

岩崎信夫 都立目黒高等学校教諭

岩田重則 早稲田大学大学院文学研究科博士課程

菊池邦彦 都立航空工業高等学校助教授

斎藤弘美 日本民俗学会会員

坂本紀子 早稲田大学大学院文学研究科研修生

柴 雅房 静岡県立長泉高等学校教諭

新谷尚紀 山村女子短期大学国際文化科助教授

杉村 齐 三島市教育委員会三島市郷土館学芸員

関根省治 静岡県立沼津東高等学校教諭

仁藤敦史 国立歴史民俗博物館歴史研究部助手

東島 誠 東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻修士課程

前田耕司 国土館大学文学部講師

松崎真吾 神奈川県立平塚江南高等学校非常勤講師

松田香代子 日本民俗学会会員

湯川郁子 一橋大学社会学部助手

渡瀬 治 裾野市立西小学校教諭

旧調査委員 脇野 博 秋田工業高等専門学校講師

(平成三年六月退任)

地区協力員

(旧村名)

西地区 植松甲子男 石脇村

同 杉山光正 佐野村

同 加藤信雄 大畑村

同 水口清文 二ツ屋新田

同 歌崎久作 定輪寺村

同 田口勝夫 富沢村

同 水口忠栄 伊豆島田村

同 関野政雄 水窪村

同 中西保男 二本松新田

東地区 杉山寛美 茶畑村

同 杉山繁雄 久根村

同 藤原善次 稻荷村

同 渡辺 香 公文名村

同 清水四郎 茶畑村

同 飯塚政高 麦塚村

同 星野直司 平松新田

深良地区 井上丹令 岩波村

同 大庭三郎 深良村

同 倉沢秀雄 同

同 小林秀年 同

同 高橋利治 同

同 一之瀬和雄 同

同 長田 稔 同

同 藤森茂良 同

同 増田一男 同

富岡地区 杉本隆彦 今里村

同 西島秀雄 千福村

同 土屋誠吾 御宿村

同 勝又茂美 同

同 勝又秋男 同

同 勝又常一 葛山村

同 芹沢正巳 同

同 柏木 仁 上ヶ田村

同 小野春隆 金沢村

同 真田林蔵 下和田村

同 土屋貞彦 須山村

同 須山地区 杉山末雄 同

事務局

教 育 長 芹 澤 仁  
教 育 次 長 川 口 陽 市  
市史編さん室長 長谷川博  
主 査 中野鈴子  
主 事 今関浩子  
事 務 員 濱 田 明  
事 務 員 野村美穂子  
事 務 員 栗原以有子  
事 務 員 永野武信

本巻関係者氏名

○監修・執筆

中野國雄

○執筆

渡 瀬 治・石田義明

執筆協力者

瀬川裕市郎 沼津歴史民俗資料館主任学芸員

井上輝夫 裾野市立富士山資料館学芸員

袴 田 稔 裾野市教育委員会社会教育課主事

笹原芳郎 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所研究員

小野千賀子 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所研究員

佐野五十三 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所研究員

○編集協力者

芹 沢 充 寛

○校正協力者

山 下 智 子・土屋香奈子

○口絵写真撮影

堤 勝 雄

○資料撮影

永 島 愛 治

○資料提供者

小野真一(常葉短期大学教授)

井上喜久男（愛知県立陶磁資料館）

朝岡康二（国立歴史民俗博物館）

植松章八（静岡県史編さん室）

志村 博（富士市教育委員会）

平林将信（ ）

渡井義彦（ ）

馬飼野行雄（富士宮市教育委員会）

渡井一信（ ）

平川昭夫（長泉町教育委員会）

足立義昭（全日本刀匠会常務理事）

富士市立博物館

愛知県立陶磁資料館

裾野郷土研究会（代表 佐藤 隆）

裾野市教育委員会社会教育課

裾野市立富士山資料館

静岡県立裾野高等学校

沼津市歴史民俗資料館

加藤学園考古学研究所

荒井哲哉・大庭三郎・萩田幸一郎・勝又 明・勝又常一

勝又 一・勝又 実・片山まさ子・清水一雄・浄土院

杉本高明・芹沢正巳・芹沢充寛・仙年寺・土屋 栄

富田昌雄・中村孝一・西川久男・持田信幸・渡辺俊一

渡辺徳逸・大畑 区・興 禅寺・光明寺・定輪寺

仙年寺・蓮光寺

○資料整理協力者

阿部 功・青木勝土・田村直美・加藤直美・山入アヤ子  
境野仁子・山本ケイ子・鈴木康代・勝又治枝・山之内マス  
子

あとがき

昨年度第一回配本の「資料編 深良用水」につづき、裾野市史第一巻「資料編 考古」を発刊する運びとなりました。

裾野市史の編さん刊行は全一〇巻を計画しており、資料編七巻（うち一巻は民俗編）、通史編二巻、図説編一巻で平成一一年度完成を予定しています。本格的に事業を開始した昭和六三年度から「市史」への導入書としての『裾野市史研究』、『叢書』及び『民俗調査報告書』等を刊行するなど調査・研究の過程でその成果や内容も随時紹介をしており事業も順調に進んでおります。

本巻は「資料編 考古」として、中野國雄専門委員会を中心に原始・古代・中世期までの考古資料を収録し、内容もわかりやすくまとめていただきました。裾野市では、昭和四二年頃から、市内各所で発掘調査がはじまり貴重な遺跡・遺物が出土、そのほとんどを本巻へ収録しております。また、それ以前からも郷土の歴史愛好家や、山仕事、農業中に地元の方々や畑地等から発見された遺物等その一部も併せてご紹介をするなど親しみやすいものと思います。

市史編さん過程では資料の収集・整理が重要な仕事のひとつとなりますが、専門委員・調査委員の先生方のご指導のもと地区協力員のお力添えを得て資料所在調査・収集・整理作業・資料データ作成・筆写など精力的に進め、古文書の整理については市民の方々、古文書を読む会、学生諸氏など多くの方々のご協力を得て行っております。現在

文書資料は約三万三千点を整理しその他既刊新聞の収集、石造物の確認調査、古写真の整理など多量の資料を整理し、なお収集、調査研究を、続けているところです。

市史編さん室で刊行の歴史図書のみならずこれら資料を全部掲載していくことは困難で限られてまいります。講演会、歴史講座等をはじめあらゆる機会をとらえて出来るだけ市民の皆様へご紹介していきたい本市の歴史を学んでいただく資料として活用をいただくよう考えております。

このたび、刊行の「資料編 考古」の編集、編纂にあたり資料所蔵者をはじめ多くの方々に格段のご配慮とご協力、ご指導を賜り心からお礼と感謝を申しあげる次第です。

なお、印刷製本については併精興社には大変なご努力をいただき厚くお礼申し上げます。今、裾野市史第二冊目の発行をまたご逝去された前市史編さん委員長の久保文和氏には本事業の開始準備から事業体制の充実まで、長くご指導を賜りましたことに深く感謝し、謹んで哀悼の意を表します。

市史編さん事業関係者一同、今後一層広い視野にたつて先人達が創りあげた貴重な郷土の歴史の保存事業を推進してまいりますのでご指導ご協力をよろしくお願い申し上げます。

平成四年三月

裾野市教育委員会 市史編さん室長

長谷川 博



裾野市史 第一卷 資料編 考古

平成四年三月二十五日 発行 ©

編集 裾野市史編さん専門委員会

発行 裾野市

静岡県裾野市佐野一〇五九  
電話 〇五五九(九二)一一一一

印刷 株式会社 精興社

東京都千代田区神田錦町三丁目九番地